

経 済 民 生 常 任 委 員 会 記 録

令和2年2月7日(金)午後3時30分～午後4時44分(9階 908 会議室)

○出席委員(8名)

委 員 長	二階堂武文
副委員長	佐々木 優
委 員	高木 直人
委 員	川又 康彦
委 員	石山 波恵
委 員	阿部 亨
委 員	小松 良行
委 員	山岸 清

○欠席委員(なし)

○市長等部局出席者(なし)

○議 題

「古関裕而氏を活かしたにぎわいの創出に関する調査」

- (1) 参考人招致意見開陳のまとめについて
- (2) 行政視察の意見開陳について
- (3) その他

午後3時30分 開 議

(二階堂武文委員長) ただいまから経済民生常任委員会を開会いたします。

議題は、お手元に配付の印刷物のとおりです。

古関裕而氏を活かしたにぎわいの創出に関する調査を議題といたします。

初めに、参考人招致意見開陳のまとめについてを議題といたします。

1月15日に参考人招致として、福島市音楽文化総合アドバイザーである三浦尚之氏に出席いただき、古関裕而を生かしたまちづくりの将来像等、様々なご意見を伺いました。参考人招致終了後、そのまま委員の皆様から意見開陳をいただいておりますが、それに基づくまとめを行いたいと思います。

それでは、お手元の参考人招致実施、三浦尚之氏、意見開陳のまとめと書かれたA4両面印刷の資料を御覧ください。まず、1としまして、参考人招致のポイントですが、今回三浦参考人からは、エ

ール放映に併せた観光の取組や地域活性化の取組も重要だが、ドラマ放映によって盛り上がった古関裕而氏や楽曲に対する機運をどのようにこの先50年、100年先まで続くまちづくりへとつなげていけるのかを考える必要があると考えており、そのための参考人の案として、古関裕而音楽コンクールの開催、ふくしん夢の音楽堂室内オーケストラ創設といった具体的な企画の提案があったかと思います。

さらに、三浦参考人のそういった考えの根底には、古関裕而氏や楽曲を通して次の福島を担う人材を育てていくことにつなげていきたい、古関裕而氏や楽曲を通して福島の子供たちに夢や希望を持ってもらいたいという思いがあり、このような方向にシンフォニーが進んでいくことで100年先まで続くまちづくりの取組となるという考えを参考人意見として頂戴したと思っております。

それを受けて、次の2、意見開陳の概要ですが、こちらは参考人から意見を伺った後の委員の皆様意見開陳の概要を発言順で掲載させていただいております。

まず、内容を各自お読み取りいただきたいと思いますので、3分ほど各自黙読をお願いいたします。

【資料黙読】

(二階堂武文委員長) それでは、皆さんの意見開陳の内容ですが、やはりエール放映終了後を見据え、こういった取組を行うかが非常に重要であるという認識に改めて立つことができたのではないかと思います。その上で、これからの福島を担う、古関裕而氏を超えるような人材の育成や発掘、古関裕而氏の業績や楽曲を語りつないでいくとともに、それらを通して若い世代に夢や希望を持ってもらう取組が重要という意見が多かったように見受けられます。

以上、記載の1と2を踏まえ、資料3、委員会のまとめを確認してまいります。今回の参考人招致では、繰り返しのようになってしまっていますが、エール放映後の次の取組が重要であると改めて再認識することができ、今後の方向性としては、この先100年続くまちづくりへとシンフォニーが発展していくため、観光面だけの取組ではなく、①といたしまして、古関裕而氏や楽曲をきっかけに、音楽や文化を通じて子供たちに夢や希望を持ってもらうことで、次の福島を担う人材育成に取り組んでいくことが必要。言い換えると、古関裕而氏を超える音楽家を発掘、育成し、古関裕而のまち福島のPRや取組を一緒に支えてもらうということ。2、若い世代の市民に古関裕而氏の業績や楽曲を伝え、語り継いでいくことで福島市に愛着と誇りを持ってもらう取組を続けることが必要といった大きな2点でまとめてはどうかと思いますが、よろしいでしょうか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(二階堂武文委員長) それでは、そのようにまとめさせていただきます。

次に、行政視察の意見開陳についてを議題といたします。

今週2月3日から5日の日程で、当委員会では行政視察を実施してまいりました。本当に、皆さん、お疲れさまでした。

ここからは、各委員の皆様より、視察先で感じたことや参考にしたい取組などを視察先ごとに意見開陳していただきたいと思っております。

それでは、早速ですが、各委員より行政視察における意見開陳をお願いしたいと思います。これ、どういたしますか。もうそれぞれに3市分けて発言してもらおうということでいいですか。それとも、浜松市なら浜松市についてまず一通りご意見をお伺いしてといったほうが分かりやすいですか。

【「委員長のお考えで、そのようでもよろしいかと思います」と呼ぶ者あり】

(二階堂武文委員長) それでは、3都市に分けて、気づかれた点とか、よかったなと思うところを意見開陳をさせていただくということでいければと思います。

そうしますと、まず最初に浜松市ということになりますが、挙手の上、ひとつお願いしたいと思います。

(小松良行委員) やはり浜松市独特の楽器メーカー工場があるといった、そういったバックボーンから、昭和56年でしたか、これ。書いてありました。昭和56年に音楽のまちづくりを掲げておって、創造都市、文化振興、この点については浜松市文化振興ビジョンというのを、今度平成30年度に新たに文化振興ビジョンの策定を始めて、令和2年4月に施行ということで、またさらにバージョンアップをして取り組んでいくといった環境にあって、非常に歴史と、さらには市民にしっかりと根差した音楽によるまちづくりが続けられているということに大変関心を持って見てまいりました。下世話でありますけれども、お尋ねした中に、どのぐらいの経済効果があるのかといったことをお尋ねさせていただきまして、その中に、ちょっと古い資料ではありましたが、あれは平成15年と言ったのでしたっけ、50億円ほどの経済効果があったというお話も聞かれました、にぎわいの創出にも大いに役立っていることであり、ぜひ市民や、あるいは子供たち、生徒たちによる、オリンピックもあることから、こうした駅前などの広場をもっと活用して、おもてなしの音楽であったり、あるいはそれぞれの学校や個人の、団体などの発表の場などをどんどんつくっていく必要があることと、あるいはこれは全ての視察先でもやはり共通したことなのですが、しっかりとこういった振興策、または今回は朝ドラということでありますので、やはりアクションプランといいますか、事業計画を綿密に策定していった進めていくべきなのだろうなと。しかし、委員長報告するのはもう6月ですから、アクションプランつくれという報告をしたところで、もうどうなのかなという気もしないでもないわけですが、それをよく感じたところです。

以上です。

(二階堂武文委員長) 委員長報告の時期につきましてはまだ。一応こちらの考え的には、朝ドラ終了時、直前ぐらいに合わせて、終わってからどのような持っていく方がいいのかというタイミングを狙ったほうが意外と受入れもしやすいでしょうし、委員会としての提言も際立つというか、というふうな考えではおりました。

(小松良行委員) すみません。ちょっと私の早とちりで、すみません。

(高木直人委員) やはり浜松市につきましては、世界的な楽器産業の集積地ということもありまして、本当に音楽が市民の間にしっかりと定着しているなというのを実感いたしました。あと、世界的な国

際ピアノコンクールの開催でありますとか、あと駅前広場において毎週土曜日に市民によるコンサートが行われているということからも、そういった音楽に対する市民意識の高さも本当にうかがうことができたかなというふうに思います。あとは、市内120校の中学校全てに吹奏楽部があるという点でありますとか、あと市内の小学校5年生全員を対象としたこども音楽鑑賞教室の開催、そういったところ、取組を見ますと、本当に将来にわたって音楽文化を伝えていこうという、そういう未来を見据えた取組をされているなということで大変注目をいたしました。またあと、2,400名収容のアクトシティ浜松をはじめとしました文化施設、こちらも整っているということで、そういった恵まれた環境もまた音楽文化が市民に根づくことにもつながっているのかなというふうに思いましたので、そういった浜松市の取組を見まして、福島市のほうを考えてみたときに、福島市におきましても古関裕而記念音楽祭を開催されておったりとか、あとは古関裕而記念館も設置しておりますし、そういった、もっとこういったものを、例えば今回のエール放映をきっかけに、全国的に福島市としては古関裕而氏を本当に郷土の誇りとして、音楽文化の中心に据えているというところをしっかりとPRできれば、本当にこれからのいわゆる福島市と古関裕而さんとのつながりの深さというか、そこをしっかりと結びつけていけるのかなというふうに、またPRもできるのかなというふうに考えました。また、音楽堂であったりとか、あとこれから駅前にそういったコンベンションホールといいますか、そういったものも整備されようとしておりますけれども、そういったところも含めて、あとはやはり未来に対する、先ほど参考人招致の件でもありましたけれども、やはり未来、子供たちにしっかりと古関裕而さん、またその楽曲を伝承していくということについても、しっかりと取り組んでいけるのかなというふうに思いましたので、何とか今回の浜松市のそういった調査を生かして、これから福島市のまたエール放映後の取組ということで、しっかりと生かしていければなというふうに感じました。

以上でございます。

(山岸 清委員) 要するに浜松は日本の楽器産業の集積地で、またホンダとスズキかな、駅に降りたらスズキの4輪車とバイクがあったよね。だから、そういう企業城下町で、羨ましいから、福島にすれば、ない物ねだりになってしまうから、やっぱりああいう企業が集まっているところは何をやるにも、税金ももらえるし、補助金ももらえるし、いいところだと……こういうことを言っただけで、記録になっただけだけれども、ただやっぱりそういう企業で、市民もそこらに勤めている人も多いだろうし、私が言ったように、野球なんか河合とヤマハはもうすごいんだから、都市対抗のあれ。ヤマハがこの頃ずっと強いと言ったけれども、河合だって黙っていないのだから。だから、やっぱりそういう、羨ましく感じたね。

(川又康彦委員) 浜松市についての感想自体は、今皆さんのおっしゃるとおりで、本当に楽器生産のバックボーンがあることによって、様々な音楽によるまちづくりの事業が行われているのだなと羨ましい面もありました。

ただ、一方で、聴取させていただいた際の質問でもちょっとお話しさせていただきましたけれども、

福島市自体も、例えば中学校である合唱コンクールですとか、小学校の鼓笛のパレードというような、三浦参考人からは新しい古関裕而さんを使った何らかのイベントとか、そういった部分というお話もありましたが、私、翻って見た際に、やはり今まで実際に行ってきた、それなりの効果も認められているのではないかなと思っています。合唱コンクールについては、私の知り合いの息子さんも、例えばその中で指揮者をやっていた子が、音楽の道に進みたいということで、成人してそういった方面に進んでいったお子さんなんかもらっしゃるということで、子供たちを音楽を通じて、音楽に関わる人をつくっていく、そういった部分の試みとしては非常に、逆に先進的な部分もあるのではないかなと改めて思ったものですから、今あるやり方をもっと、ただ鼓笛パレードで一つの通りをだあと1校ずつ歩いて、はい、おしまいという形ではない、もう少しにぎわいにもつながるような行い方とか、合唱コンクールについても同様で、全体的で、全校を集めて、ある日にちでやってしまうとか、いろんなつくり方というのは改めてあるのかなということを感じましたので、そういった部分をぜひ教育委員会とうまく連携しながら行っていくことが福島市にとっては重要なかなと感じました。

以上です。

（阿部 亨委員）今まで皆さん言われたとおりのそんな感じなのです。やはり本当に地元企業の工場とか、そういうのがもうできていて、地域的なもの、地盤というのができているということと、事業的に企業の関わりとかで予算などもあって、いろんな運営に多大な協賛などもあるのかなということは分かりました。それが本当に羨ましい部分はそうなのですが、やはり人づくりというのですか、先ほど高木委員からは、吹奏楽でしたっけ、管弦楽でしたっけ、全ての中学校にそういう部があるとか、本当に小さいときからそういうのがもう当たり前といいますか、自然とそういう部分があるわけなのですね。そういうのに触れる部分も十分あると。あと、いろんなコンクールとか催物も様々ありまして、そういうのに発表する部分、触れる部分も非常に多いと。アクトシティの稼働率なんていうのはたしか85%以上ぐらいのことを言っていたのですけれども、いろんなことがやっぱりやっているわけなのです。そういう部分で、人づくりという部分が、小さいときから、そういう部分が自然とやっぱりできている部分があるのかなと思うのです。これが本当に一長一短でできるものでもないですし、先ほどの参考人招致の意見開陳等でも出ましたが、50年とか100年とか、そういう長いスパンで、伝承とか、そういうことでやっていく、築き上げていける部分なのだなというふうには、そういうのは感じました。芸術文化の成果とか結果というのは非常に見えづらい部分というのはあると思うのです。必ず本市からそういう音楽家が出るとか、そういうことではないと思うのです。ただ、幅広く考えて、コンクールを通してそういう人が育っていただければと。本市からとかではなくて、そのきっかけにとか、そういう部分の発信とか、できると本当にいいのかな。それが本市のそういう全てそういうものを通して、音楽家とかが育っていったとか、人が育っていったということで、本当に人づくりというのができたとか、見えたのかなという部分があればいいなというふうに感じました。

以上です。

(石山波恵委員) やはりあのキャパの大きいアクトシティ浜松の稼働率が85%ということで、本当に音楽の鑑賞や発表の場となる施設が多くあり、そこをまた多くの市民が利用したいと思って動いているという市民性というか、それも福島の市民の人の性格とはまた全然違って、どうしても福島の人というのは人任せとか、熱しづらく冷めやすいというか、人任せみたいなのところがあり、みんなで盛り上がっていきこうとかって、例えば地域のスポーツとか、いろんな育てて、野球にもバスケにもサッカーにも、みんなでといっても一部の人だけでという形で、みんなでというのがなかなか福島市民の人たちというのは、スポーツに限らず、音楽にしても、そういう部分があるので、ここと同じことをやったからといって福島の人がみんなで発表して、みんなで盛り上がるかというところもまた、市民性が違うので、なかなか違う部分等もあると思うのですけれども、さっき川又委員がおっしゃったように、鼓笛隊なら鼓笛隊をもうちょっと、どんなやり方で広めていったり、今あるものをもう一回検証しながら、ちょっと仕切り直したり、改めて福島市民の人が盛り上がって、それが今度NHKのドラマ、エールと同じように日本中に発信していけるようなものにちょっと変えていったりというような、福島から新しい音楽家をつくっていこうとか云々ではなく、あるものも1つ見直すというのもまず第1段階でできることかなと思うのですけれども、ただやっぱり音楽のまちづくりというのをあれしながら、本当に浜松ならではの都市資源というか、やっぱりすごい企業がある、バックボーンがあるというのは改めてすばらしいと思って帰ってきました。

(二階堂武文委員長) 川又さん、石山さんもおっしゃいましたけれども、都市資源、それぞれのまち固有の持っている都市資源、そういった中で福島市も綿々と鼓笛パレードとかやってきているので、ではそれを市なんかでも、鼓笛で弾いていただく楽曲を、古関さんの、編曲していただいて、鼓笛に合うような形で編曲していただいて、今流のものをミックスさせていく中で、小粒でもパンチの利いた、そういった音楽催事というか、パレードにしていく、特徴を打ち出していくみたいな、今までにあるものをさらに特徴づけしていくとかという試みというのは本当に大事だと思います。

(佐々木優委員) 浜松市は、あれだけの事業をこなしているということで、やはり基本的な文化政策がちゃんとしているなというのをすごく感じました。文化振興ビジョンをやってみて、人材育成もそれなりにサイクルができつつあるというのが分かっていて、それを磨いていくというふうにおっしゃっていたのですけれども、やっぱり柱がしっかりしていると長く続いていくのではないかなというふうに感じました。文化振興ビジョンって、つくってもつくらなくてもいいものらしいのですけれども、福島市はまだ未整備なのですね。なので、そういったこともちょっと検討していつてはどうかというふうに思うし、やっぱり古関裕而さんを通してどういう福島市になっていくのかという、そのビジョンがないと、単発で終わってしまうのではないかなというふうに改めて感じました。

以上です。

(二階堂武文委員長) そこを私もちょっと調べようと思って、調べ切れなかったのですけれども、今佐々木委員のほうから発言されましたけれども、そこはすごく大事ですね。福島ならではの文化振

興ビジョンをきちっとつくって、その中に古関裕而氏が残したいろいろな業績とか、そういう遺産をそこにどう取り込んで、きちっと位置づけることができるかというのは本当にポイントかなと改めて話を聞いていて思いました。

私も、皆様からいろいろご発言がありましたが、世界的な楽器産業の集積地であり、楽器、また音楽に関わる技術や人材が浜松市ならではの都市資源になっているという中で、昭和56年から、先ほど来小松委員からも出ておりましたが、楽器のまちから音楽のまちへ継続的に取組をされてきて、今日に至っていると。音楽文化の集積というものが都市ブランドを形成するに至っているという発言が、キーワードとして都市ブランドという言葉も出ました。その中には、浜松国際ピアノコンクールと静岡国際オペラコンクールが国際音楽コンクール世界連盟に加盟して、2つの加盟コンクールが開催されるのは国内で唯一の都市だというようなことをおっしゃっていました。やはりそういった音楽文化の蓄積というものは、浜松の場合は30年にわたってというお話でしたが、やはり本当に時間をかけて蓄積していく、それが一つの都市ブランドというか、その都市の特徴を形づくっていくものになるのだなと改めて思いました。以上です。

では続きまして、岡崎市ということになりますが、またそれぞれ。

(小松良行委員) 短めに。よくあの内田さんのコレクションを市が寄贈を受けて、しかも最初は小さな展示だったのですけれども、ああした大きな図書館ができるにつれ、きちんと展示を所蔵しておいたというか、英断だったなど。そのときの例えば文化課とか、あるいは市長部局が、そんな寄贈要らないよと言われてしまったらどうなっていたのだろうかということ。特にあの時代、時代背景とすれば、ジャズというのはどっちかというマイナーな音楽だったはずなのですが、そこにすごく傾倒、傾注して、やっぱりまちづくりに生かせるのだと内田氏は思ったのかどうなのか、その辺はちょっと定かではないのですが、やはりこれをきっかけに、また彼の人脈を通じて、ミュージシャンとの交流だったり、また市民の仲間と共に、こうしたジャズのまちというふうな位置づけまで押し上げていったということには非常に感銘を受けたところではありました。多くの、市民のみならず、全国からも、ジャズに関して岡崎市の取組に興味を持って、訪れる人たちも多くあるやに受け止めましたし、マイナーな音楽とかいうふうな位置づけということではなくて、やはり様々にこういった嗜好といいますか、音楽については嗜好が、趣味が違ったりはするのですけれども、こういった特質的な一つのジャズといった、ジャズにおいてだけでも人を呼び込めるというか、これはやっぱりそうしたコレクションと、たった一人の力だったのか知らないですが、そこから広がる大きな力になっていったということにはちょっと驚きと、そして福島などもそうなのなのですが、発信力の弱いと言われるまちにとっては、何かこういったことから導き出す手だてではないものかなとも感じたりもしました。

以上です。

(高木直人委員) やっぱり内田修氏のジャズに対する情熱が、本当にジャズのまち岡崎をつくっていったという、その市民の取組としてしっかりと引き継がれたのだというのをすごく感じました。やは

り今小松委員おっしゃられたように、本当にジャズというのはどちらかというと一般的になじみが薄いというか、ちょっとマイナーなジャンルではあるのですが、その音楽ジャンルを市民の中に根づかせていこうという、例えば非常に印象的だったのが、小学校とかにジャズバンドが伺って、子供たちが吹く笛を使ってリズムを、ジャズのリズムを実際に弾いて奏でさせるというか、ジャズってそんなに難しくないのだなというのを、そういった身近な楽器を使って子供たちにしっかりと教えられていた場面が非常に印象的だったなというふうに思います。そういった底辺から丁寧にジャズ文化を根づかせていこうという姿勢も非常にジャズのまち岡崎というまちづくりにつながっているのかなと思いました。

あとは、ちょっと注目したのが、それまでやはり市民の中でジャズというのがいまいち浸透していなかったのが、純情きらりというドラマが放映されてからがらりと変わったというふうに担当者の方もおっしゃられていましたけれども、やはりドラマの影響というか、大きいなというか、それを見て、あっ、岡崎ってジャズがあれなのだ、まちなのだというか、そういった市民にしっかりと認識を新たにさせることができ、それから契機に岡崎ジャズストリートであったりとか、そういった様々なイベントを開催することによって、さらに根づかせていったというか、そういった、上手だなと、手法が。市民意識の向上にしっかりとつなげていった点が非常に上手で、それはやっぱりこれからエールの放映を控えた福島市にとっても非常に参考にするべき点かなというふうに思いました。本当にブームを一過性に終わらせることなく、しっかりと我々も古関裕而さんの名前と楽曲が続くように、今後エールの機会をしっかりとやっぱり捉えていくべきかなというふうに思いました。

以上です。

(山岸 清委員) 委員長と2人で昼飯を岡崎で食ったのだっけか、あそこは。

(二階堂武文委員長) ジャズを聴きながら。

(山岸 清委員) そのレストラン的なところでやっぱりジャズが流れているのだよね。だから、やっぱり福島でも、あそこは流していますよというリストには入っていない店だったのね。だから、一般的にやっぱり福島でも食堂で六甲おろしでも流してもらえばいいのではないかな。何でも古関メロディーを流してもらおうと。

(二階堂武文委員長) 夜はバーなのですからけれども、昼ランチだけやっている駅前のお店だったのですね。

(山岸 清委員) 結構広かったね。

(二階堂武文委員長) そうですね。BGMとしてジャズを流されていて。

(山岸 清委員) 長崎の鐘が鳴るでは昼飯にならないな。

(川又康彦委員) 岡崎については、2つの側面から気にしている部分がありまして、ジャズのストリートで演奏するというのは定期的にやられていて、民間のほうでもいろいろあって、そういうのが各種行われているというお話もありました。飯坂で、これはジャズではないのですが、おと酔いウォー

クというイベントがありまして、それはかなり、ちょっと定着してきているのですが、これはロックを中心にして流す、町なかでやるようなイベントがあって、こういうものに何か参考になる部分ないかなと思って聞いていたのですけれども、実際にちょっと参考にはならなかったのですけれども、やっぱりそういう民間主体にして、ちょっとずつ小さなそういうイベントが増えていくというのは、音楽という側面で、ジャズにしろロックにしろクラシックにしろ、市民の中に浸透していく一つの方法なのかなということを改めて思いました。

もう一つは、こちらのコレクションを集めた展示のスペースを行政のほうでつくるというのについて、そこまでするのかなというのが正直なところで思いまして、これをきっかけに、ジャズを通じてどういうふうにしていくかということを考えるきっかけになっていったのだろうなとは思いましたが、個人的にはそこまでなくていいのではないのかなというのが正直に思いました。ただ、古関裕而さんについては実際に音楽を作った方の記念館ということでありますので、そこを、音楽の展示の仕方とか、そういったものについては参考になる部分もあったので、その辺を福島にどのようにフィードバックできるかというのを考えていかなければいけないのかなと改めて感じました。

以上です。

(阿部 亨委員) 岡崎のこの事例という、これは特殊というか、ある程度特異な部分があるのかなとは思いますが。まず、この内田修氏、こういう方がいて、本当にそもそもジャズが好きで、そういう形で、ドクター・ジャズと言われるぐらいなのですが、それを寄贈して、そこから始まるという部分、こういうのってやっぱりなかなか、普通に考えて、難しい部分はあるのかなと思うのですが、これを本当に一つのきっかけにしてやったという部分はいいと思うのですけれども、例えば福島市内を見ても、いろんな音楽とかジャズとかにも限らず、好きなことばかり、そういうことをやっている方はいらっしゃると思うのですけれども、では果たしてこのような形で、例えば何か寄贈なり、そういうことをやって、こういうふうに発展したりするというのはなかなか難しい部分はあるのかなとは思っているのですけれども、今回は本当にこれが特異な、特殊な部分が成功したといえますか、そういう一つの例ではあるのかなとはまず思いました。ただ、それがこのジャズという、先ほど来出てきた、いまいちマイナーといえますか、そういう音楽が、そういう分野の部分がこれだけ浸透してきて、やっているという部分ではやっぱりすばらしい部分はあると思いますし、市民の方がそれを受け入れてといえますか、行政もうまくそれに乗かってやっている部分はあると思うのですけれども、このような形でいろいろやっているという部分では、本当に参考になる部分というのはたくさんあるのかなとは感じました。

以上です。

(佐々木優委員) 皆さんおっしゃっていたように、ジャズというジャンルで振興していくという、大きな特徴ではあるけれども、すごく難しいのではないかなというふうにも思った部分がありました。テーマを絞り込むと、興味を持つ人も絞り込まれてしまうのではないかなというふうにも思った部分と、あとそれから新たな、例えば高木委員もおっしゃっていたように、小学校での映像なんかも見

も、すごく楽しそうで、一緒にセッションができたとかという、そういう体験って子供たちの感性がすごく豊かになっていくのではないかなというふうに素直に思えたのです。なので、難しい分野にチャレンジをしたという岡崎市はすごいなと思うのと、やっぱりテーマを絞り込むことの表裏一体というか、そこにもちょっと注目をしたらいいのではないかなというふうに思いました。古関裕而さんを通してということになると、狭いのか広いのかと、そういうところもちょっと考えていかないと、今後につなげていくのにどういう影響があるのかなということもちょっと考えないといけないかなというふうに思いました。

(石山波恵委員) やはり内田氏の一人のただの趣味がこれほどまで、ただの趣味で終わらず、行政まで動かしながらこうなったというのが本当にすごいなというふうに思いましたし、やはりジャズというマイナーな部分のところに特化してまでもやったということがすごいと思ったのと、あと高木委員も言いましたけれども、純情きらりが出て、市民の目線が、認知度が上がって、みんなでジャズ、ジャズと言いだしたということは、福島も今古関裕而ということでみんなで盛り上がっているけれども、いまいち市民の人は、ふうん、何やっているのだいという感じのところなので、実際にエールが始まって、火がついたように、何か市民の人も改めて古関裕而氏の、すごいのだね、もっと古関裕而の何か、ミュージックフェスティバルやるよといったら、ではやろうと初めて火がついたり、そしてそれで視聴率なんかすごく上がったりすると、何か自分のことのように喜びながら、市民の人がやっとな動くのではないかなというか、実感したり、そういうのがだんだん、遅咲きながらそういうのがだんだん後から回ってくるのではないかなと思いました。やはりこれから例えば古関裕而氏を生かしたミュージックフェスティバルとか何かやるにしても、市民の人が主役になるイベントづくりで、例えば同じジャズのところでも仙台ジャズフェスというのがもう何年もやっていますけれども、あの9月にやる、あそこに出るがために全国から、あそこに演奏したいと思わせるような、人が集まる魅力あるイベントになっているからこそ長く続け、それが伝統として残って、次の時代まで何十年も続いていくということなので、もし古関裕而氏を生かしたこれから福島で何かとなったときは、魅力あるもので、みんなが参加したい部分のところで何か考えていくというのもすごく大事なのではないかなと、改めて自分の福島市において何かを考えると、行政はあくまでもサポートしていきながら、市民の人、また全国の人が来てもらえるようなフェスティバルみたいなものというのも大事なかなというか、そんな形も含めて考えてもいいのではないかなと思いました。

(二階堂武文委員長) では、私、最後にちょっと。

私も岡崎市の話を聞いていて、2つ分けて考えなくてはならないなと自分の頭の中では思いました。1つは、ジャズって難しそうに見えて、本来は楽しくて自由なのだよということ、そのジャズの魅力の奥深さみたいなのに気づかされたときに、また広がりができるみたいな部分と、もう一つは、これが私どものテーマということにもなるのでしょうけれども、それが、野原に火がつくと、ばあっと、燎原の火のように、ということでそれほどにNHKの連続テレビ小説作品、純情きらりの放送という

のが、追い風どころか、とんでもないやはり火をつけていくことになったということで、これを2004年に市民発の岡崎ジャズを楽しむ会が母体となって岡崎ジャズストリートができた。それ2年後、2006年の春から純情きらりが半年間スタートして、一気にマイナーからメジャーなものにということで、市民に広がると。それほど連続テレビ小説のインパクトが大きいということで、先ほど石山委員がおっしゃったように、今は市民の方は気づきませんが、これが放送されて数か月たったときに状況は一気に変わるというところで、この土台、変わった土台を基に、次、それをどう、何に仕掛けていくのかというか、仕上げていくのかという部分がやはり問われている、大事なことになってようかとは思いますが。

私も……一言断らないと駄目なのですね。ちょっと訂正があったのですが、私、家へ帰りましたら、大友さんが4回ほど講演とか何かで足を運ばれたというような話がありました。実は福島夜間中学の校歌をお作りになって、それをどこか、音楽堂の小ホールか何かで講演やったときにちょこっと、文教福祉にいたものですから、文教福祉にお誘いがかかって、行ってきました。それで、しっかりとサインもいただいて、初版本なのですが、これを休みにちょっと読んで、休みというか、この期間ちょっと読まさせていただきました。意外と人、物、金、やはり何か事をなすときに必要になってくるものが人、物、金ですが、浜松は企業城下町ということで音楽産業があったという、金もあったというところですが、こちらは人ありきということで、内田さんのジャズへの熱い思いが種をまいたというところになるかと思います。そのときにやはり福島にも意外と、三浦先生なり、大友さんなり、音楽の道で頑張っていらっしゃる方がやはりいらっしゃると。この辺の人を連ねていくことによって、ちょっとインパクトのある音楽のイベントとか何か、やはり道が開けるのかなというのをぼんやりちょっと思いました。最後に感想を一言述べさせていただきました。

最後になります。ということで、恵那市のほうに最後に移らせていただきます。

(小松良行委員) 先ほども浜松のときにも申し上げたのですが、やはり朝ドラの効果の大きさというのは非常に大きいものなのだなと。観光交流課の方のお話の中でも、これまでに見たことのないぐらいの人の多さ、特に名物である五平餅を焼くお婆さんは腱鞘炎になるほど忙しかったというお話を聞くにつけ、たしかデータでは真空パックのものが3.3倍でしたか、あとお店は2倍から5倍の売行きだったということもあり、この影響の大きさを改めて知るところとなったわけですが、やはりこれを契機と考えて、これを活用事業アクションプランというものを、これ平成30年5月に策定しています。平成30年の4月2日からドラマの放送始まったのですが、少し出遅れ感というものにじみ出ていたようでしたし、特にこの事業について、訪れた観光客の満足度を向上する取組や観光客の購買意欲を向上する取組として発信力、魅力を発信する取組と誘客を促進する取組、この事業をしっかりとプログラム策定したこと、当初は企業側のほうもなかなか腰が上がってこないという中であつても、何とかドラマの盛り上がり、あるいはドラマ終了後も訪れる観光客に向けての商品開発が続いていて、大きな成果が今なお続いていることに、福島もさらに今福島にある、先ほど川又委員が別の

ところで申し上げましたけれども、たくさんの福島のいい点をブラッシュアップする、またこういった観光客に向けて発信をしていくということの重要性を再認識したところであり、何度も申し上げますけれども、委員長報告がどういうタイミングになってくるのか分らないですが、アクションプランつくってくださいよということぐらいはもう3月ぐらいに中間報告で言ってもいいのではないのかなという感じを持っています。

ほかの方々のご意見もありますので、このぐらいにしておきます。

(二階堂武文委員長) やはりシンフォニーがそれなのではないですか。

(小松良行委員) シンフォニーが。位置づけとしては、そういうことになってしまうのかな。でも、もうちょっと商品とか何か、開発とか……。

(二階堂武文委員長) 商工会議所さんが補助金ついたりなんかいろいろされていますけれども、募集していますけれども。

(川又康彦委員) ただ、まだ予算の裏づけはないですからね。

(高木直人委員) やはり朝ドラ放映を地域おこしや観光集客につなげようとして取り組んだ点においては今回の我々福島市に本当に参考になるところも多かったのですが、逆にやはり後手に回ったという点が非常に、逆に言えば反面教師的に、ちょっと注意して見なければいけないなと思ひまして、実際に放映が始まって、観光客が大量に押し寄せてから、その観光客のアンケートを基にして施設の整備とか、何か商品開発したとかというところを見ると、本当に、いや、ちょっともう少し早めにこれはもう、そこを見越して手を打つべきだったのではないかなというふうにちょっと思いました。ただ、後手に回ったとはいえ、様々な商品開発をして、五平餅であったりとか、青いプリンであったりとか、それを開発したことによって大きな経済効果を生んだという点は非常に参考になるのかなというか、ただ本当に今福島市どれだけ今回のエール、古関裕而さんに関わる関連商品、どこまで進んでいるのかなと、逆にちょっと知りたくなったというか、大丈夫なのかなというか、せっかくの機会なので、ぜひ本当に、ただ実際にそれを商品化したところについては採算取れるのかどうかというご心配があるとか、いろんなお話もありますので、そこは一概には申し上げられないのですが、せっかくの機会でございますから、本当にしっかりと経済効果、波及効果という部分も生み出すような、そういったものを考えていただければなというふうに思います。

あとは、放映終了後にNHKからロケセットとかを譲り受けて、それをしっかり観光地化に生かしたという点もやっぱり参考にすべきかなというふうに思います。ですので、特に福島にとっても、NHKエンタープライズですか、こちらのほうのしっかりとしたパイプを、それこそ参考人招致した三浦先生にしっかり例えばつなげていただいて、NHKエンタープライズさんとのパイプをしっかりと築いていただいて、もし放映終了後に活用させていただけるものであれば、しっかりと譲り受けて、それをこれからの福島市の観光PRであったりとか、そういった観光地、ロケ地巡りの何か、あるかもしれないけれども、そういったところに生かせればいいのかなというふうに感じました。

以上です。

(山岸 清委員) それぞれ結局駐車場の対策だね。あと、お土産物。福島は春先、花見山で来てもらう、いつも議会で言うのだけれども、秋口ならいっぱい果物からあるのだけれども、やっぱり春先は花ではお土産物にならないけれども、ただ恵那にしろ、浜松にしろ、それぞれ既存の、五平餅にしろ、うなぎパイにしろ、あるのだよね。ただ、福島だと、むぎせんべいかい。あとは、視察のときのお土産に昔、昔だよ、俺らの前の代の世代、しみ豆腐を送ってやったのだ。そしたら、しみ豆腐を送ってやっても食いが分からないから、みんな煎餅だと思って食っていた、しみ豆腐。お汁の身なのに、みんなもらった先で煎餅代わりに。だから、しみ豆腐煎餅なんていうのもいいのではないかななんて思ったりもしたのだけれども、ただお土産物の開発と、あと駐車場はもう今から、花見山に来るときからもうこれは考えて。花見山のあそこでお土産物を売っている人で一番もうかっていたのは、シイタケの傘開いたやつ、あれ、こんな袋に、はい、500円、500円なんてやるのだ。あれは、飯食わないでやっていたよ。俺手伝ってやるかいと言ったけれども。要するに来るお客さんは年寄りだから、軽いやつがいいのだよ。軽くて、そしてシイタケこんなになって、かさがあるから、やっぱり見ばえするのだろうな。飛ぶように売れていくのだ、傘開いたシイタケ。庭坂から持ってくるのだよ、あれ、たしか。庭坂にあったでしょう、シイタケ屋。

(二階堂武文委員長) 斎藤椎茸園。

(山岸 清委員) あそこのシイタケ、それこそ1人であんちゃんもう大変なのだ。俺手伝ってやるくらい。やっぱり年寄りだから、重いやつ駄目なのだよ。軽いやつがいいのだね。もっとも、私もそれお土産、結局どこでも買わないで、福島で買って、持っていくのだ。福島の土産を東京土産として。重いから。

以上、土産と駐車場、急いでやってもらうように。でも、委員長報告6月では。今さら……。

(二階堂武文委員長) いやいや、決まったわけではないですし、当初の予定は大体秋口あたりという予定であります。

(山岸 清委員) 分かりました。

(川又康彦委員) 恵那については、完全にNHKの朝ドラの効果という部分の調査をさせていただいたというのを改めて感じました。市当局の方も売上げが非常に増えたというお話をしていたのですが、私個人的には、そんなものなのというのが実は正直なところで、倍、3倍ぐらいの、それはもともとの恵那というところのキャパシティを考えた際に、ある程度当たり前だと思うし、もうちょっといくべきだったのではないかな。例えばお土産についても、すごく売れましたよという話もありましたが、金額ベースで見ると、それほど大したこともないというのが正直な感想で、その辺が最初の当初の取組が少し遅れたというところが多少影響しているのかなというふうに感じました。

翻って福島を考えた際に、これまで行っている事業、これから行う部分も含めて、補正もつい

た部分等を含めて、かなりの部分で、この恵那で行ってきたのを下敷きにしているなというのを改めて感じました。ストリートをつくって、そこにいろんな垂れ幕とか、そういったものを作ったりとか、あとは商品化にあたっての福島市独自のロゴを作ったりとか、ラッピングについても、向こうは電車だったけれども、こっちはバスにするというような部分も含めて、多分直接参考にしたのだろうなと思うところが非常にあり、このままだと同じ感じになるのかなという思いが少ししました。向こうについては、まだ見る場所というところ、市当局の方も、ドラマを見て訪れてきた人が欲している部分について、NHKからもらったものとか、そういったものを展示してというお話ありましたが、特に福島については行くところが古関裕而記念館しかないという現状がある中で、そのところをどういうふうにしていくのかというところをきちんと考えていかないと、単にお土産屋さんなのか、そういう部分をもう一度決めないと、古関裕而記念館だと、まちの外れではないですけども、中心のほうではないわけですから、どういうふうに人の流れを持っていくのかというところをきちんと考えて対策を打っていかないと、実際には古関裕而記念館は3倍、4倍来たけれどもというような結果になってしまうのかなというところを強く感じましたので、そのところをどういうふうにするかというのを改めて感じました。

あと、委員長報告の時期については、先ほど中間報告でという話もありましたが、放映前の形で何か1つは市当局に様々な部分の提言も含めて少しお話をしたほうがより効果的な調査報告になるのかなというふうには感じました。

以上です。

(阿部 亨委員) 朝ドラの絶大な効果というか、それは十分感じてきたのですが、放送前にいろいろできること、確かに今、後手に回っている部分とかはあるというお話なのですけども、なかなかNHKとの、NHKエンタープライズでしたっけ、NHK当局とのやり取りとかで、やはり内容とかというのは知ることはなかなか難しいという話だったのですよね、放送前の段階では。そういう部分でちょっとやっぱり難しい部分というのはあるのかなとは思ったのです。そうすると、やっぱりドラマが始まってから、いろいろそれに関連してはやっていくことになるのかなというふうに、そういうことに関しては、それに早急に対応するような体制なり対応をしていくということなのかとは思いました。あとは、やはり放送中、放送後の取組なのだと思いますけれども、なかなか確かに、先ほど来意見出ていますとおり、現実的な問題、先ほどの古関裕而記念館の場所とかキャパとか、そういう部分、あと見せる部分では、あとほかに特にはないのかなとか、いろんな部分があるので、その辺のもう一度考え直すというか、しっかり考えていくということ。あと、やっぱりアクションプラン等々の制定というか、策定はすべきなのかなというふうには強く感じました。

以上です。

(石山波恵委員) やはり今の福島を見て言えることは、先ほど山岸委員がおっしゃったように、まずお土産、花見山云々もそうですけれども、まず駅前通りを古関裕而ストリートにしても、立ち寄る場

所とか、あとお土産買う場所とか、ただのぼりとか旗あっても、わくわくして楽しい部分のところの演出がまず、お土産買うものがないし、今商品開発いろいろして、いろいろ市民の人にアイデア出してもらったりしていますけれども、まずお土産、こんなにあって楽しい、わくわくしたりするお土産ショップを演出したり、あと古関裕而記念館のところを見ても、まず駐車場が目に見えて、大型バスあそこに何台か来たらば、止めるところもないし、あと周りの駐車場もないので、それこそ今、日赤の駐車場とか、やっぱりインフラの部分で今分かって、もう目に見えてパーキングが少ない、土産が少ない、ところがないというところは対策を考えないと駄目だし、あと古関裕而マップがあって、ロケツーリズムではないですけれども、マップがあって、例えば信夫山の石碑とか云々のところも、あそこに載っているマップのところにちゃんと人があのおり行ったときに楽しめるような、満足度を高めるといえるのか、インフラの部分も含めての整備ということと、あとNHKエンタープライズさんととても仲よくしてもらおうように要請といえるのか、1個でも何か使ったものが寄贈してもらええるような陳情や云々のところで、今後福島に訪れた方々が、お客様の満足度を上げるための努力というの、向こうの方は本物を展示するとかということではあるんですけど、やはりNHKエンタープライズさんと親密になって、陳情していったら、何かあったらもらええるような、仲よくしていくというのも大事だし、やはり本当に、川又委員も言いましたけれども、恵那市を、後といえるのか、4月から始まって、6月ぐらいまで何もできなかったと、慌ててやっただけと言いましたけれども、それを生かして、今麒麟がくるに頑張ってる新しいのになっているのかななんて思いながら、あれだったんですけど、私たちもそうならないように、今日に見えてできることをやっぱり1つずつクリアしていくという、単純な作業ですけど、そういうふうなのに取り組むということも大事だなと思いました。

（佐々木優委員）お話を聞いて、何がヒットするかというのがちょっと放映されないと分からないような状況もあるのだなというのを実感しましたし、そのせいでいろいろ対応が遅れていったというのもすごくうなずけるなというのがありましたので、その話も当局は重々分かっていると思うので、あれやこれやの対策を今取っているのだらうなというふうに思うのですけれども、恵那とちょっと違うのは、やっぱりロケ地が福島にあるのかなのかと、そこがすごく薄いところが、定着した場所というのがないというところが……。

【何事か呼ぶ者あり】

（佐々木優委員）ということは、そういうところも考慮したことになっていくのだらうなというふうになりますけれども、そこをどうやって満足してもらおうか、それこそ、来てもらって、満足してもらって、リピーターになってもらうかという観光客の皆さんの対応と、あとやっぱり市民の皆さんも、このドラマを見ることによって、へえっとなって、古関裕而さんに興味を持ってというふうにもなるかなと思うので、その展示の仕方なんかもやっぱり工夫していかないと、そしてこれを一過性に終わらせないという工夫がやっぱり必要なのだなという、これは本当にもう観光とか古関裕而さんに特化した内容を考えるには恵那市の取組はすごく参考になったなというふうに思います。

(二階堂武文委員長)では、私のほうから。

まず、視察に行く前、古関裕而のまち・ふくしまシンフォニーの説明を受けたときに、皆さんのお手元にもあろうかと思いますが、このアクションプラン、こんなに細かいことをいっぱいやって、消化不良になってしまうのではないかというのがちょこっと正副の打合せのときか何か出ました。当局説明、こんなに細々といっぱい大丈夫なのみたいな。それが恵那市に行って、こちらの資料を見せていただいたときに、のみ込めたというか、あっ、そうなのだと。参考に、どこまで参考にされた、どうのこうのというのは今後行って聞きますけれども、参考にされたなということで、あっ、これはまさしくアクションプランをエールが始まる前に、昨年おつくりになって、福島は着々と準備を進めているということを私どもも説明は受けていると、受けたということをちょっと確認はしたいと思うのですが、そういった中で、まず1つとして、私、そういった意味で当局としてこれだけ細かいシンフォニーのいろんな企画を今やっている、準備している途中かと思うのですが、私どもがどういったふうな提言をどのタイミングでするのかと、先ほど来いろいろご意見ありましたので、その辺なんかもちょっと検討しなくてはならない大事なポイントですし、細かい現場でやっている作業というのを見ながら、やはり常任委員会として、大所高所から、先々を見据えた形で、意外と尻をどっしりと落ち着けて提言できるのがやっぱり委員会の強みかなということを考えますと、現場で頑張っている、準備をして、もう最中の動きと私どもの動きをどううまくマッチングすることによって、福島市にとってプラスになるような、50年先、100年先にプラスになるような提言できるかと、その辺の視点というのは1つ今後やっぱり大事なポイントかな、上滑りしないようにするには大事なポイントかなというふうに思います。矢を放つタイミングというのを見据えた上で、私どもの持てる力をうまくそこに合わせていければというふうに思います。

というのと、あとお話聞いていて、私、会派のほうでお世話になって、ゲゲゲの女房の舞台となった境港市をお伺いしましたときに、あそこには既に観光インフラが結構整っていたのです。ゲゲゲの像が。そこにゲゲゲの女房がオンエアされたものですから、受け入れ体制が一定もうできている中での放送だったので、すごくかみ合って、いい結果と結びついた、持続性も、継続性も出たというところかと思いますし、恵那市の場合はそれが逆に出遅れてしまっているという部分で、ただ次長さんですか、負け惜しみではないと思うのです。やっぱり現場で旗を振っている人だから、言ったことだと思うのですが、私どもとしてみれば、これをきっかけにインフラ整備ができてよかったというような発言をされていました。確かに遅れたのですけれども、これによって観光のインフラ整備、観光に対する考え方とか何かが整理もできたし、インフラ整備もできたし、案内所も仮設のものを造れたしみたいところで、物事何でも準備万端整ったところからスタートできるというわけではないのは現実ですので、そういった意味では、やはり途中発車で、その中で現実をどう受け入れながら、古関裕而と福島の観光とか、それをかみ合うようにどう持っていけるかと、現実的な対応をやっぱり今福島市は問われていて、行政現場はそれで四苦八苦しているのかなというふうには受け止めたいなと私自身

はちょっと思いました。

1つだけ、古関裕而記念館に100人しか1回で入れないと、消防法の関係でというのは今までこの委員会でやってきました。大型バスは、日赤の駐車場には止めれなくて、あそこの記念館の脇に三、四台入れるスペースしかありませんというような、それでもやりくりということを今考えているみたいなことですし、今、今後、春先に向けて内装を変えて、入場料金の件なんかもちょっと検討されているやにいろいろ情報を聞いていますから、事態は今いろんなところで動いているなという気はちょっと受け止めております。いろんな貴重なご発言を頂戴しましたので、これをちょっとすり合わせながら今後まとめていければと思います。

この点につきましては、ありがとうございました。

そうしまして、次に行きます。それでは、本日頂いた意見を基に、後日の委員会で行政視察のまとめを行いたいと思いますので、よろしくお願いします。

そのほか委員の皆様から何かございますでしょうか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(二階堂武文委員長) なければ、以上で経済民生常任委員会を終了いたします。

午後4時44分 散 会

経済民生常任委員長 二階堂 武文